

2022年4月3日 説教「いばらの冠」

ヨハネの福音書 19章 1~16節

これから、受難週、復活節を向かっていきますので、列王記の学びをお休みし、主の受難と復活の出来事を、ヨハネの福音書を通して、学んでいきます。



ヴァン・ダイク「茨の冠のキリスト」

1. 受難の始まり (1~5)

①キリストの捕縛 (1~3)「そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした。また、兵士たちは、いばらで冠を編んで、イエスの頭にかぶらせ、紫色の着物を着せた。彼らは、イエスに近寄っては、『ユダヤ人の王さま。ばんざい。』と言い、またイエスの顔を平手で打った。」18章の出来事。真夜中に主イエスはイスカリオテ・ユダの手引きによって、祭司長、パリサイ人たちから捕縛された主イエスは、大祭司カヤパの尋問を受けました。明け方になり、帝国の地方総督ピラト官邸に送られて、尋問を受けます。ピラトはイエスに罪を認めることができませんでした。バラバとイエスのどちらかを釈放することにしました。人々は、バラバの釈放を要求しました。そして19章に入ります。ピラトは仕方なくイエスを逮捕し、むち打ちにします。兵士たちは、イエスが王であると認めたことから、ふざけていばらで作った冠を頭にかぶらせました。そのとげがささったことでしょう。また、高貴と考えられていた紫色の着物を、王服とて着させたのです。そして、「ユダヤ人の王、万歳！」と叫んであざけり、イエスの顔を平手打ちしたのです。

②あの人を連れ出し (4)「ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。『よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということ、あなたがたに知らせるためです。』」総督ピラトは念を入れるようにして、イエスを引き連れてきた祭司長たちの前で言ったのです。「あの人をここに連れてくるが、あの人には罪も見つからないことを伝えているのです。

③この人です (5)「それでイエスは、いばらの冠と紫色の着物を着けて、出てこられた。するとピラトは彼らに『さあ、この人です。』と言った。」イエスは、兵士達が弄んだいばらの冠、紫の着物のままで外に出させられます。「さあ、この人だけれど、どうするのだ。」とピラトは尋ねます。

2. キリストとピラト (6~11節)

①ユダヤ人の言い分 (6~8)「祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、『十字架につける。十字架につける。』と言った。ピラトは彼らに言った。『あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。』ユダヤ人たちは彼に答えた。『私たちに律法があります。この人は自分を神の子としたの

ですから、律法によれば、死に当たります。』ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れた。」ところが、祭司長たちは激しく、イエスを十字架につけると叫んだのです。ピラトは説得を諦め、「自分たちで十字架につけたらどうだ。私には罪を見いだせないのだから」と言うと、ユダヤ人は「いや、私たちの律法では、自分を神の子とした彼は冒瀆罪によって死刑です」と反論。これにはピラトも彼らを恐れるのでした。

②沈黙の主 (9~10)「そして、また官邸に入って、イエスに言った。『あなたはどこの人ですか。』しかし、イエスは彼に何の答えもされなかった。そこで、ピラトはイエスに言った。『あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。』」ピラトは官邸で、その素性を尋ねていますがイエスは無言です。そこで、ピラトは自分には釈放する権威がある同時に十字架につける権威もあることを伝えます。要するに対応次第では十字架を免れる可能性があると言ったのです。

③権威の源 (11)「イエスは答えられた。『もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。』」イエス・キリストは権威の源は、天の父なる神にあるのだということを示されます。そして、イエスを総督ピラトへと渡し、十字架につけようとする人々に大きな罪があることも語られました。

3. ピラトの決定 (12~16 節)

①釈放を望むピラト (12)「こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようとして努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。『もしこの人を釈放するならば、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。』」意外にもピラトはイエス釈放のため相当の努力をしたのです。ところが、ユダヤ人たちは、自分を王とするイエスを釈放することは、カイザル(ローマ皇帝)に背くことになるという論法で、ピラトの考えを否定しました。

②裁判の席 (13~14)「そこで、ピラトは、これらのことばを聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石(ヘブル語ではガバタ)と呼ばれる場所で、裁判の席についた。その日は過越の備え日で、時は第六時ごろであった。ピラトはユダヤ人たちに言った。『さあ、あなたがたの王です。』」ピラトはエルサレム西部にあったと考えられる、ガバタ(敷石の意味)という広場で裁判を始めました。過越の祭りの備え日の第六時(昼の12時)頃に「この人はあなた方の王です」と改めて判断を迫りました。

③十字架刑を承諾 (15~16)「彼らは激しく叫んだ。『除け。除け。十字架につける』」ピラトは彼らに言った。『あなたがたの王を私が十字架につけるのですか。』祭司長たちは答えた。『カイザルのほかに、私たちに王はありません。』そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。」すると、ユダヤ人たちは、ローマ帝国の法の下にある十字架刑をつけることを求めたのです。ピラトは皮肉もこめて、あなたがたの王を十字架につけるのですか、と尋ねるのですが、ユダヤ人はカイザルこそが王で、自分達に王はないとまで言うのです。そこまで言われれば、もはや仕方がありません。ピラトもイエスを十字架刑をつけることを承諾したのです。

《結論》今朝の聖書箇所を読んで意外だと思われた方がいらっしゃると思います。つまり、今朝もともに読みました使徒信条には、キリストが十字架にかけられるにあたっては、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」とありますが、

ヨハネの福音書に記されているピラトはなんとかしてキリストを釈放しよう

としているのです。そんなことから、旧会堂時代からこの会堂のごく初期まで熱心に礼拝参加していた木下義信さん(受洗まで至りませんでした。キリストを信じ、命を終えられました)は、ピラトは、こんなにイエスを助けようとしているのに、どうして使徒信条では悪者の代表のように言われているのですかと疑問をなげかけておられました。その時にお答えしたことと今朝お伝えすることとはほとんど同じですが、今朝はそれを共有しましょう。

確かに今朝の記事を読むと、キリストを十字架刑に至る経過において、それを推進したのは祭司長をはじめとするユダヤ人たちでした。ピラトがキリストには罪は見いだせないから釈放させようとしても、それを受け入れずに、ピラトにねじ込んで十字架刑へと繋げていったのは、ユダヤ人たちでした。一方の、総督ピラトはキリストと対話をしようとしています。18章ではキリストに「真理とは何ですか」(38節)と質問するほどの興味を持っていました。そこでは、キリストは答えておられません。「わたしは、道であり、真理であり、命です」(14:6)と言われた主はあえて、ご自分が真理であることをピラトには伝えておられません。その後、ピラトはユダヤ人たちの熱意に押されて、ついにキリストを十字架刑へと舵をきってしまったのです。彼は自分でも言っているように、十字架につける権威を持っていたのです。そして、その権威を用いたのです。彼がキリストを十字架につける最終権威者であることに間違いはありませんでした。だからこそ、使徒信条においては、「ポンテオ・ピラトの下に苦しみを受け」というのは正しいのです。

しかし、私たちはもう一歩進めて考えなければなりません

ん。つまり、ピラトは確かにキリストを十字架につけた最終責任者です。いわば、罪人の代表者と言っても良いでしょう。しかし、ここで理解しなければならないのは、キリストを十字架につけたのは、私たち自身だということです。「すべての人は罪を犯した」（ローマ 3:23）とあるように、罪人である者たちがキリストを十字架につけてしまったのです。ピラトの名が使徒信条にあるのは、彼は

罪人の代表であり、祭司長やパリサイ人、いばらの冠をかぶらせた兵士達も同罪です。その意味では、使徒信条のピラトのところに自分の名前を入れて読むのがわかりやすいのです。

キリストはいばらの冠をかぶり、血が流れどれだけ苦痛だったことでしょう。それに、人間的に見れば受けた屈辱もあります。しかし、罪人である私たちが救われるために、苦痛も屈辱も引き受けてくださったのです。

私たち人間は、その主の犠牲を覚え、救い主であるキリストを仰いでいくことが肝心なのです。私たちの罪の身代わりとして、それらを受けてくださった方を、あなたの主として受けいれていきましょう。信者の方は改めて、未信者の方は、今こそこの方を救い主として信じていきましょう。